

# 学生時代のH.F. チェルヌイシェフスキー 日記（1848-1850）から

大 矢 温

はじめに

I チェルヌイシェフスキーの急進思想

II ペテルブルクの学生時代

むすび

## はじめに

従来ソヴィエト史学の影響のもとに「革命的民主主義者」、あるいは「ユートピア社会主義者」として知られてきたH.F. チェルヌイシェフスキーは、クリミア戦争敗戦後のロシアを時代背景として、農奴制改革の議論においては社会的経済的弱者の立場に立って自由放任経済を批判し、農村共同体擁護の論陣を張った。彼は農奴制改革を含む一連の改革が日程に上る1850年代後半のロシア論壇において、ロシアの脆弱な自営業者や、農奴解放によって解放された小農が国際資本主義の中に放り出され、その結果零落、プロレタリアート化することを危惧し、そこからの救済策として産業においては協同組合、農業においては農村共同体に着目した。彼はここに資本主義の根本たる私有財産制に代わる所有形態を見、共有という所有形態に自由放任経済がもたらす無制限な自由競争からの避難所を見たのであった。さらに彼は逮捕拘留中に小説『何をなすべきか』を書きあげ、この中で「新しい人々」の共同生活を描くことによって読者大衆に「理性的エゴイズム」という新しいモラルを説いた。これは当時の国内の論壇においては最左翼に属する急進的な思想である。

本論においては、このような急進的な思想に至るチェルヌイシェ

フスキーの思想形成の出発点を、ペテルブルク大学在学中の彼の日記を素材として分析する<sup>1</sup>。

## I チェルヌイシェフスキーの急進思想

「革命的民主主義者」、あるいは「ユートピア社会主義者」としてのチェルヌイシェフスキーに対する評価については、ソヴィエト的レジュームの崩壊後、すでに30年以上が経過しているにもかかわらず、新たな評価が確立しているとはいいがたい。ソヴィエト時代に分不相応に高く評価されてきた反動か、ソヴィエト崩壊以後、日本においてもほとんど研究対象になってこなかったのである。研究状況が大きく変化している以上、今日的状況において彼の思想の急進性について再確認をする必要があろう。

まず、農奴改革を目前に控えた1858年に彼が「上からの改革」に見切りをつけて「上からの改革との対立に転換した」<sup>2</sup>、つまり改革から革命へと方針転換した、という従来のテーゼについて検討してみよう。従来、この転換の契機となったのは彼の「一連のリベラル批判論文」である、とされてきた。例えば1858年に発表された論文「カヴェニャック」において、チェルヌイシェフスキーは「フランスにおけるリベラリズムと改革主義の腐敗と反動性について語りながら」「ロシア・リベラルの正体をも暴露し」「唯一の解決策が農奴制の革命的な根絶と専制の転覆である」ことを主張したとされる<sup>3</sup>。

---

1 チェルヌイシェフスキーの学生時代の日記を素材にして「チェルヌイシェフスキーの学生時代における座標定位と初速度形成」を確定し、「ラジカルな空想社会主義者」として「出立する雄々しい姿を描き上げることを主題」とした研究として、武井勇四郎『チェルヌイシェフスキーの歴史哲学』、法律文化社、2000年がある。チェルヌイシェフスキーの思想展開を主に理論面から分析した本書に対し、本論は思想の基底となる実生活に重点を置いて彼の思想展開を分析するものである。

2 石川郁男『ゲルツェンとチェルヌイシェフスキー』、未来社、1988年、64頁。

3 Н.Г. Чернышевский: Полное собрание сочинений в 15 томах. Т. 5. С. 919. 以後この全集からの引用は [V, 919] のようにカギ括弧内に巻数と頁を示す。

この点については、彼の「リベラルに対する批判」が、「平和的な改革という政治路線」を批判した、というよりはフランスのリベラルが「自らの本質を忘れ、自らの真の利益を見誤ったことにある」、つまり、彼らが非合理的に行動しその結果フランスを混乱に陥れたことを、啓蒙主義の立場から批判した、との読み方が可能であることを別稿で示しておいた<sup>4</sup>。しかも「カヴェニャック」においてチェルヌイシェフスキーが批判の俎上にあげるのは、リベラルだけではない。「多くの誤りをしでかした」「それぞれの党派」が「致命的な展開」をもたらした、というのが彼の第二共和制認識なのである [V, 5]。この論文がリベラルの平和路線に対する急進派からの批判ではないのなら、1858年の時点においても彼が平和的な改革を否定したわけではないことになる。農奴解放令公布後の1862年に彼が皇帝に宛てて「宛名のない手紙」を書いていることから、彼が「上からの改革」路線を完全に放棄してもっぱら革命路線に転換した、とはいいがたい。

また、「革命家」としての彼の評価についても、革命への関与を証明する証拠がない以上、「革命的な檄文の執筆、配布に彼が関わっていた」、さらには革命的秘密結社に関与していた、とする従来の説についても見直す必要がある<sup>5</sup>。彼の「ユートピア社会主義」理論の実践である共同体についても、それが所有権の一形態に過ぎず、「あらゆる国家形態と等しく併存することができる」ものであり、したがって、そこへの移行は「革命を伴う政体変更を必要としないこと」も、すでに指摘したとおりである<sup>6</sup>。この点からも暴力革命や陰謀による政府の転覆、という意味で彼を「革命家」と呼ぶことは不適切であろう。

---

4 大矢温「H.F. チェルヌイシェフスキーと『リベラル』との位相関係」、『札幌大学総合論叢』、2019年、第47号、41頁。

5 大矢温「チェルヌイシェフスキーと小説『何をなすべきか』」、中島康予編著『暴力・国家・ジェンダー』、中央大学出版部、2019年、所収、34頁。

6 大矢温「H.F. チェルヌイシェフスキーの『革命的民主主義』再考」、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』、2015年、第82号、119頁。

新たなチェルヌイシェフスキー像を描くにあたって、彼が掲げた共同所有という所有権の形態が、国家が担保すべき権利として構想されている点、それ故、理論的には既存の体制と共存できる所有の形態であること、また、「革命性」に関しては、彼の暴力革命への関与が証明できないこと、この 2 点を出発点にしたいと思う。

他方、彼の組合論の「ユートピア性」については、これもまた別の場所ですでに論じているテーマではあるものの<sup>7</sup>、印刷されるのが 2 年以上先であることと、日本では入手しにくい媒体であることから、ここにかいつまんで再論するのも無駄ではないと思う。

上述のように、クリミア戦争敗戦という国難に遭遇し、農奴制の廃止を含む大規模な国内改革が不可避となった 1850 年代後半のロシアにおいて、改革の方針をめぐって国内の論壇はかつてない活況を呈した。クリミア戦争の敗戦は、ロシアの全般的後進性を白日の下にさらし、その大規模な改革を焦眉の課題として提起したのであった。国際競争の中に投げ出された脆弱なロシア経済の立て直し、特に農奴制の改革が中心的な課題となった。その中でチェルヌイシェフスキーは、当時論壇で優勢だった自由放任経済論を批判して、自由主義経済を採用している西欧においては「無制限の競争が弱者を強者の犠牲にし、労働を資本の犠牲に」した結果、小農、小生産者はプロレタリアートに没落したことを指摘し、農奴解放後のロシアにおける農村共同体の意義を強調したのだった [IV, 729]。農奴解放によって自作農になったロシアの農民が、自由競争の中で土地を手放し、プロレタリアート化することを防止するために、農村共同体を維持することによって土地の私的売買を禁じ、共同耕作による大規模営農によって競争力を維持しよう、というのが彼の共同体擁護論の骨子である。それと同時に彼は、工業においても労働者による企業の共同所有と共同運営、というヴィジョンを提示する。「農

---

7 *Он Оя* “Утопичность” Н. Г. Чернышевского: Ассоциации как реальный шаг к посткапиталистическому обществу // Н. Г. Чернышевский. Статьи, исследования, и материалы, Саратов. Вып. 23, 2022 (в печати).

業における土地の共同体的利用」と「工業における企業の共同体的財産への移行」の両者が「新しい志向」として並行して論じられているのである [IV, 740]。

つまり彼の「急進性」とは、当時支配的な思潮だった自由放任経済理論に対して、弱者の視点から根本的な批判を行ったことにある。そしてその上でロシアの農民や小生産者が弱肉強食の自由競争の犠牲にならないための避難所として共同体を提示したのであった。彼の共同体論は、資本主義の根本原理である私有財産制に対する彼の批判と密接不可分に結びついているのである。根本的、という意味で「急進的」、多数者である弱者の視点で論じた、という意味で「民主主義」、放任型資本主義に対案を提示した、という意味で「社会主義」なのである。

さて、1859年5月号の『現代人』に発表された「経済活動と立法」は自由主義経済理論を正面から批判し、経済関係への国家による積極的干渉を主張したものであった。ここでは私有財産制度に基づく個別の小生産に代わって「アソシエーション ассоциация」という生産様式が提示されている。この論文においてチェルヌイシェフスキーは、自由主義経済理論は中世の制約に対しては歴史的意義があるものの、「その当時から事情は著しく変化した」[V, 589-560]としてこれを「遅れた経済学派」[V, 592]と名付け、すでに時代遅れになった過去の理論だと断じている。時代遅れになった「遅れた経済学派」の自由放任経済に対してチェルヌイシェフスキーが読者に紹介するのは、「現在イギリスの第一流の経済学者とみなされている」[V, 593] J.S. ミル、およびミルのアソシエーション論である。ミルの『経済学原理』から引用しながらチェルヌイシェフスキーは「共同体的所有と生産物の平等な分配のシステム」が「非現実的だということはできない」[V, 594]と主張するのだった。その上でチェルヌイシェフスキーは「経済関係への国家の積極的干渉」として、国家に対してこの「新しいシステム」を法的に位置づけるような立法措置を要求したのであった [V, 615]。しかしこの時点では

チェルヌイシェフスキーはこの「新しいシステム」の具体的な内容を明らかにしていない。ただ、「ミルによって私有財産制度の中でも可能とされている変革の内容については、読者諸君にはミル自身の著作の中で発見していただきたい」[V, 595] と述べるのみである。

これは当時チェルヌイシェフスキーがすでにミルの『経済学原理』のロシア語への翻訳を開始しており、1860年2月号から『現代人』誌上で詳しい解説を付けてそれを発表し始めた、という事情が作用している。ただしこの『『経済学原理』への評解』は、ミル本人の文章を翻訳するだけでなく、それにチェルヌイシェフスキーが詳細な評解と補足を付けたために膨大な分量となり、分割して連載という形で『現代人』に掲載したにもかかわらず、雑誌の誌面を圧迫し、この年の末までにかろうじて『経済学原理』の最初の一冊を訳出したにとどまった。したがって、「読者諸君」はミルが「新しいシステム」について、つまりアソシエーション的生産について論じた第四篇「経済的進歩」、政府の干渉について論じた第五編「政府の影響」を『現代人』の1860年の誌面から、「ミル自身の著作の中で発見」することはできなかったわけである。

ただし、「新しいシステム」について、「読者諸君」は「ミル自身の著作の中」ではなく、チェルヌイシェフスキー自身の著作の中でその具体像を「発見」することになる。チェルヌイシェフスキーはミルの『経済学原理』の翻訳作業と前後して、1860年1月号の雑誌『現代人』に論文「資本と労働」を発表しており、この論文において彼は自由主義経済理論に対して「勤労者の理論」という名の自らの経済理論を対置、さらに論文の末尾で「勤労者の理論実現のプラン」として「組合 товарищество」<sup>8</sup>の具体像を提示しているのだ。

「経済学の根本原理」として「生産」と「分配」の問題にアプローチしたチェルヌイシェフスキーは、「最も有利な生産の条件は、労

8 先の「アソシエーション ассоциация」とほぼ同じ意味で解釈できるが、「組合 товарищество」においては生産のみならず生活全般の協同化が論じられているように読み取れる。

働の成果が勤労者に属する時である」と主張し、また功利主義の影響のもとに<sup>9</sup>、「価値の最も有利な分配」、つまり一定量の資源が最も多くの福祉を生み出す条件を、「価値の総量をその社会の人数で割った平均値に最も近い場合」と主張した [VII, 49]。その上で彼は、勤労者の独立経営が生存競争に生き残るのは「組合形式においてのみである」と結論したのだった。無制限の生存競争の中では小さな経営は生き残ることができず、勤労者は組合として大きな経営に結合した場合にのみ、生存競争を生き延びることができるというのだ。

この論文「資本と労働」の最後の部分でチェルヌイシェフスキーは「勤労者の理論」を実現する組合の具体的なプランを提示している。それによれば、1500人から2000人の勤労者が自由意思で組合に加入し、政府の融資を受けて一つの建物で共同生活をする。組合員は各人の能力に応じて工業や農業に従事する。組合の運営は自主運営。組合員から選出された管理人が行う。利益は組合員に配分される。他方、消費に関しては、家賃は共同住宅なので「ずっと安い」し、消費物資は共同購入によって安く仕入れることができる [VII, 57-63]。組合設立に必要なのは、設立時の政府による融資と共同所有を法的に保証する立法措置のみである。これは1859年の論文「経済活動と立法」の結論を敷衍したものであるし、また、オーウェンやフーリエらユートピア社会主義者が描いた共同生活をモデルにした組合モデルともみなすことができよう。しかし、チェルヌイシェフスキー自身もミルの著作からオーウェンのニューハーモニーの失敗や、ファランジェ建設に失敗したフーリエらの実践について知っていたはずだ。それにもかかわらず、チェルヌイシェフスキーはここでこの組合モデルが実現可能だと信じている。

彼の確信はおそらく、上述のミルの『経済学原理』第四編で紹介されている組合的生産の実例に基づいている。ここでミルは、フラ

---

9 См. *Он Оя* Английский утилитаризм и «гипотетический метод» Н. Г. Чернышевского // Н. Г. Чернышевский. Статьи, исследования, и материалы, Саратов. Вып. 21, 2018.

ンス第二共和制下のパリにおけるピアノ職人のアソシエーションの例を紹介しているのだ。ミルによれば、二月革命後のパリにおいて 14 人のピアノ職人が資材と道具、そして若干の資金を持ち寄って共同生産を始め、1 年後には「輝かしい成功を取めた」という。さらにミルは「パリだけで 100 以上の成功した、中には多くの非常に成功した、労働者のアソシエーションが存在している」と論じ、「アソシエーションについて、1851 年 12 月 2 日までに希望だけではなく、それが資本家との競争に首尾よく持ちこたえていることの肯定的な証拠とともに語るができるようになっていた」[IX, 653] と主張している。ミルにとっても、チェルヌイシェフスキーにとっても組合（アソシエーション）はもはやユートピアではなく、事実によって証明された現実であった<sup>10</sup>。チェルヌイシェフスキーはパリのアソシエーションの成功例を根拠に、資本主義に代わる「新しい」様式として、現実の問題として組合を論じているのである。

周知のごとくチェルヌイシェフスキーはこの後 1862 年 7 月に逮捕され、ペトロ・パヴロフ要塞監獄に拘留されたため、ロシア文壇とはほとんど絶縁状態になる。唯一の例外が、彼が獄中で執筆した小説『何をなすべきか』である。副題は「新しい人々についての物語」であり、「新しい人々」を通して新しい生き方、つまり新しい男女の在り方や組合的な共同生活が示される。女主人公のヴェーラ・パヴロヴナはジョルジュ・サンドの愛読者で古臭い家の拘束から逃れるために、やはり「新しい人」でフォイエルバッハやコンシ

---

10 ブランキのアソシアシオン論を紹介する中で高草木氏は 1840 年代のフランスにおけるアソシアシオン運動の高揚を背景に第二共和制政府が 48 年に 300 万フランの補助金を支給し、それによってアソシアシオン（生産協同組織）が実際に設立されたことを指摘し、「48 年を経験した思想家にとって、アソシアシオンはもはや具体的現実」であった、と論じている。高草木光一「政治革命と総合的アソシアシオン」、高草木光一他著、『アソシアシオンの想像力』、平凡社、1989 年、84 頁。この「300 万フランの補助金」とは、「労働者生産協同組織助成法」、別名「7 月 5 日法」と呼ばれる法律によって予算化された生産協同組織の助成のための基金で、同法案は 1848 年 7 月 5 日の国民議会においてアトリエ派のゴルボンの提起によって満場一致で採択された。河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979 年、397 頁参照。

デランを読んでいるロプーホフという医学生と結婚することによって家を出る。やがてヴェーラが自分の親友キルサーノフを愛するようになったことを察したロプーホフは自殺を装って姿を隠す。一旦は姿を隠したロプーホフだが、物語の最後で新しい愛人とともに現れ、四人は隣り合った部屋で仲良く暮らす。ここでは一夫一妻制に代わる男女の関係が示され、近代的な自我に代わる「理性的エゴイズム」という道徳律が示される。近代的エゴイズムが自らの利益を合理的に追及する生き方だったのに対し、「理性的エゴイズム」は他人の幸福を自らの幸福に感じ、それを追及する生き方である。さらに小説の中でヴェーラは自立のために女工を雇って裁縫店を営業するのだが、そこでは店の利益をすべて女工たちに配分する。店の運営も全員で決める。裁縫店の営業が軌道に乗って規模も拡大すると、従業員たちが共同生活をするための宿舎を用意し、保険制度や共同購買制度を導入する。しかもこのような「新しい」生活は、この小説が1856年7月11日早朝のペテルブルクを舞台に始まっていることから[XI, 5]、現実と切り離されたものではない。努力しさえすれば普通の人でも到達可能な「現実」として「新しい生活」が説かれているのである。

他方、現実と切り離されたユートピアとしての、共同体の理想像は小説の中で「ヴェーラの夢」という形で開陳される。いわばチェルヌイシェフスキーのユートピアである。ここでは1000人以上の人が水晶宮<sup>11</sup>のような巨大な施設で共同生活をしている[XI, 277]。機械のおかげで重労働はなく、労働は楽しみになっている[XI, 278, 282]。高度な科学技術の発展を前提としていることで「ヴェーラの夢」は現実と切り離されたユートピアといえよう。

小括しよう。チェルヌイシェフスキーの思想の急進性とは、陰謀

---

11 チェルヌイシェフスキーにとって1851年のロンドン万博の会場となった水晶宮は産業と科学のシンボルであると同時に自由主義経済の脅威のシンボルでもあった。On OЯ H. Г. Чернышевский и Хрустальный дворец: как символ достижения промышленности и свободной экономики // 日本ロシア思想史研究学会『ロシア思想史研究』第10号、2020年、参照。

や暴力という「革命的」な急進性ではない。私的所有に代わって共同所有という法的形態を所有権の分野に導入しようとしたこと、および近代的自我に代わって「理性的エゴイズム」という倫理規範を紹介したこと、そして 19 世紀のロシアにあって女性の自立と自由恋愛を説いた、という意味で「急進的」なのである。しかもこれらはユートピアではない。達成可能な、現実の延長として構想されているのである。

## II ペテルブルクの学生時代

1846 年にサラトフの神学校を途中退学したチェルヌィシェフスキーは、ペテルブルク大学進学のために母親に付き添われて 1846 年 6 月にモスクワ経由で 40 日以上かけてペテルブルクに到着した<sup>12</sup>。ペテルブルク大学を卒業して再びサラトフへと発つのが 1850 年 6 月なので、哲学部文学科（のちに歴史文学部）に在籍したこの 4 年間はペテルブルクにおけるチェルヌィシェフスキーの学生時代、ということになる<sup>13</sup>。サラトフの神学校生から急進的思想家への転機として、ヨーロッパ全体が激動した 1848 年をはさむ、この 4 年間は大きな意味を持つはずである。幸いチェルヌィシェフスキーは 1848 年 5 月から日記をつけている。本論ではこの日記を手掛かりに、のちの急進思想につながる学生時代の彼の思想を分析してみよう。

大学 1 年生当時のチェルヌィシェフスキーについて、当時同居していた同郷の友人 A.Φ. ラエフは次のように回想している。「大学の講義にチェルヌィシェフスキーは欠かさず出席し、厳しく精進を守り、教会に通い、机上の本は聖書だった」<sup>14</sup>と。サラトフの長司

12 モスクワ-ペテルブルク間に鉄道が開通したのは 1855 年なので当時は馬車で陸路、移動した。

13 Демченко А.А. Н.Г. Чернышевский: Научная биография (1828-1858). М.-СПб. 2015. С. 133.

14 А.Φ. Раев Записки о Н.Г. Чернышевском // Н.Г. Чернышевский: Pro et contra / Под ред. Демченко А.А. СПб. 2008. С. 74.

祭の長男として深く宗教的な教育を受けてきた元神学校生はペテルブルクに来たあともロシア正教の強い影響下にあったのである。

しかし大都会ペテルブルクは到着直後から彼に強い印象を与えていた。ペテルブルク到着直後の6月21日の父に宛てた手紙で彼は、ペテルブルクには非常に多数の本屋があること、建築中のイサーク聖堂の壮大さ、そしてここで学べることの「死ぬほどの喜び」と感謝を伝えている。また同時に、いとこのリュービンカ<sup>15</sup>らには、今住んでいる部屋の自慢（「英国屋<sup>16</sup>の目と鼻の先」）や出世の意気込み（「年収5万ルーブル」「その時は遠くないように思われる」）を興奮した調子で伝え、彼女らがペテルブルクに来た折はネフスキー大通りを散歩しようと誘うのだった [XIV, 19]。もちろんこの時点でチェルヌイシェフスキーは彼女らがペテルブルクに来るとは考えていないはずで、これは冷やかしを含めた自慢と解釈できよう。

ところがこのリュービンカ、1847年にサラトフ神学校教師のИ.Г.テルシンスキー<sup>17</sup>と結婚すると、夫の転職を機にペテルブルクの住民となる。1848年6月のことと推測される<sup>18</sup>。一方のチェルヌイシェフスキーは、それまで同郷の友人ラエフと暮らしていたが、以後、1850年にペテルブルクを発つまでテルシンスキー夫婦のフラットに同居することになる。日記の記述から、夫婦のフラットは夫婦の寝室と広間、それから下女のアンナとマリアが寝泊まりしている台所からなり、チェルヌイシェフスキーは広間の長いすで寝起きしていたことがうかがわれる。当時のペテルブルクの住宅事情を考慮し

---

15 Любовь Николаевна Котляревская (Терсинская) (1824-52). チェルヌイシェフスキーの母親の妹の娘。チェルヌイシェフスキーとは子供のころから兄弟づきあいしていた。「リュービンカ」は彼女の愛称。

16 Английский магазин. ニコライ一世も通った高級店。建物は Невский пр. 16 に現存。

17 Иван Григорьевич Терсинский (1817-1888). ペテルブルク神学アカデミーを卒業後、サラトフで神学校教師をしていた。父はサラトフ大主教。1847年に宗務院などの職務のためにペテルブルクに上京した。最終的には枢密顧問官まで出世している。См. Русский биографический словарь. СПб. 1912.

18 1848年7月10日の日記に「リュービンカ、ペテルブルク住民になってすでに1カ月以上」との記述がある [XIV, 152]。建物は Вознесенский пер. 41 に現存。

たとしても、個室で生活していた以前の暮らしと比べると、明らかに住環境は悪化している。しかしそれでも彼がテルシンスキー夫婦との同居を選んだのは、一つには親しいリューピンカと暮らしたい、という思いもあったかもしれないが、金銭的な理由も大きかったのではないかと想像される。実際、チェルヌイシェフスキーはテルシンスキー夫婦には家賃を払わない一方、実家に対してはそのことを秘密にして仕送りを受けている。手紙や仕送りもテルシンスキー夫婦の住所ではなく、大学止めにしている [XIV, 151]。

さて、最初のころこそはテルシンスキーも嫁の「弟」ということで一緒に風呂屋に行ったり冗談を言ったりして、努めて友好的にふるまったものの、当のチェルヌイシェフスキーは二人の冗談を聞きながらも「何か心からの満足がない」[I, 39] ことを感じている。そもそも宗教関係者で政治的には保守主義者であるテルシンスキーと、当時すでに「社会主義者の正しさを確信した」と語るチェルヌイシェフスキーの馬が合うわけもなく<sup>19</sup>、あからさまに政府の批判をするチェルヌイシェフスキーに対して「そこから国家秩序が崩壊し、いまフランスで起きているようなことに行きつく」とたしなめるテルシンスキーと、それに対して「正義は国家のために存在するのではなく、国家が正義のために存在するのだ」と反論するチェルヌイシェフスキーとの両者の対立は同居直後から明らかであった [I, 46]。そもそも新婚早々の夫婦の家に大学生が同居していること

19 学生時代のチェルヌイシェフスキーは「菓子屋」Кондитерскаяに足しげく通っていた。「菓子屋」とは、茶菓子を提供する喫茶店のような店だが、新聞雑誌も備えており、特に外国の新聞や雑誌をそろえていたヴォリフ (Невский пр. 18) やイヴァノフ (Гороховая ул. 36) がチェルヌイシェフスキーのお気に入りだった。ヴォリフは「文学カフェ」として現存。菓子屋のほかにもチェルヌイシェフスキーは友人のラエフから「秩序党」系の Journal des Débats を毎号借りて読んでいる。ここでの「社会主義者」とはフランス第二共和制の文脈での「社会主義者」と解すべきで、「労働の権利」を主張し国営作業場を提案したルイ・ブランやブルードンが当時のチェルヌイシェフスキーにとっての「社会主義者」ということになる。しかし、日記から判断する限り彼がルイ・ブランやブルードンの著作を読んだ形跡はない。輸入が許された保守的なジャーナリズムによる「社会主義者」批判の記事からチェルヌイシェフスキーはフランス「社会主義者」の思想と行動を学んだのである。

自体、気づまりなもので、チェルヌイシェフスキーも同居開始早々「家を出たいと思った」と記している [I, 47]。

同居の不便は1849年の夏に頂点に達した。夏休みにテルシンスキー夫婦が都心のフラットを引き払って郊外の別荘に引っ越してしまったのだ。リュービンカからは金を請求され、「ただで住んでいることがひどく恥ずかしい」と日記に記していることから、夫婦との仲は相当悪くなっていたと思われる。5月15日に市内での用事から帰宅後、夫婦がすでに別荘に発ち、自分が置き去りにされたことを知ったチェルヌイシェフスキーはこの日、夫婦を追って徒歩で9時間近くかけてマーラヤ・クシェリョーフカにある夫婦の別荘にたどり着いている [I, 277]。しかも市内のフラットはすでに引き払っているのに、この夏、大学やアルバイトなど、市内に用事があるときには二日ばかりを覚悟しなければならなかったし、夜は市内の友人宅に泊まらなければならなかった。友人宅を転々とした後、さすがのチェルヌイシェフスキーも「放浪にはうんざりだ」[I, 315]と弱音を吐いている。他人と同居することがいかに精神的な重圧になるか、彼は身をもって体験したのだった。

同居問題に関連して、友人のB.И. ロボドフスキー夫婦との奇妙な関係についても触れておく必要がある。不可解なことに、テルシンスキー夫婦との同居が始まった1848年6月ごろから、チェルヌイシェフスキーはサラトフの両親からの仕送りやアルバイトで稼いだ金の大部分を友人のロボドフスキーに渡している。当然のことながらこの援助は両親、および当時彼が居候していたテルシンスキー夫婦には秘密であった。おそらく最初は友人の窮状を救うためにテルシンスキー夫婦との同居によって不要になった家賃分の金を渡していたものと思われる。ロボドフスキーのほうも最初こそは遠慮がちに金を受け取っていたものの、やがて完全にチェルヌイシェフスキーからの金を頼って生活するようになる。他方、チェルヌイシェフスキー本人は有り金のほとんどすべてを彼に渡しているのに、慢性的な金欠に悩まされることになる。服が破れ、靴にも穴が開き、

文房具を買う金にも事欠く中でも彼はロボドフスキーへの援助を続けている。それによって長司祭の息子としてそれまで何不自由なく育ってきた彼が初めて貧乏を経験したのだった。1848年の晩秋には「冬が近づいているときに貧者が何を感じるかを多少理解した」[I, 126]と日記に記している。

さてこのロボドフスキー、ウクライナの貧乏な聖職者の家庭に生まれ、ハリコフの神学校に進んだものの、そこで教師に反抗したために除籍処分となって以後、放浪し、ペテルブルクまでたどり着き、ペテルブルク大学哲学部文学科の自由聴講生になった、チェルヌイシェフスキーより5歳ほど年上の青年である<sup>20</sup>。両者の出会いについては不明な点も多いが、彼がチェルヌイシェフスキーと親しくなったのは1847年の初めごろと推察されている<sup>21</sup>。神学校を中退したチェルヌイシェフスキーとはその境遇が似ていること、また、作家ゴーゴリや急進的な文芸評論家ペリンスキーの愛読者であったことなどが両者を近づけたのかもしれない。

しかしチェルヌイシェフスキーが彼に対して強いあこがれのような感情を抱いていたことも指摘する必要がある。また、彼の妻、ナヂェージュダ・エゴロヴナに対する強いあこがれも同様に見逃すことはできない要素である。

まずはロボドフスキーの妻、ナヂェージュダとの関係から考察しよう。チェルヌイシェフスキーが彼女を最初に見たのは、1848年4月、ロボドフスキーと彼女の結婚式の日、控えの間でのことだった。チェルヌイシェフスキーは一目見たときから彼女が気に入ったようで、その後、教会へ行った時も「彼女はますますよく見えた」「式の間中、私は彼女を見、見とれていた」と、すっかり惚れ込んでいる [I, 32]。チェルヌイシェフスキー自身、ロボドフスキー夫婦に対する自分の感情を理解しかね、結婚式の一週間後に書いている。「これは彼への友情だろうか、それともナヂェージュダ・エゴ

20 Демченко. С. 147.

21 Там же. С. 146.

ロヴナに対する愛情だろうか」[I, 35]。

その後、ほぼ毎日チェルヌイシェフスキーはロボドフスキー夫婦の家を訪れ、長い時間をそこで過ごすようになる。居候をしているテルシンスキー夫婦の家では居心地の悪さを感じていたチェルヌイシェフスキーもここでは居心地の良い安らぎを感じられたのであろう。あるいは彼にとっては一種の共同生活のようなものだったのかもしれない。実際、1848年10月にロボドフスキーが病気になると、彼が肺病で死ぬかもしれないと心配し、彼の死後、ロボドフスキーに代わってナチェージュダと結婚することを夢想している [I, 157]。1848年8月に金銭的援助の理由を尋ねられた時に「彼女が悲しまないように」と答えていることから、チェルヌイシェフスキーの主観の中では彼はロボドフスキー夫婦と共同生活を営んでいるように思われていたのかもしれない。

この点に関して、学生時代のチェルヌイシェフスキーにおける「極端なジョルジュ・サンド精神」[I, 288]は指摘しておく必要がある。以前からジョルジュ・サンドの愛読者であったチェルヌイシェフスキーは、特にジョルジュ・サンドの「テヴェリノ」に「釘付けとなり」、「彼女の作品はすべて読まなければならない」と書いている [I, 275-276]。また、夫の親友との結婚、そしてその後、夫の夫婦との共同生活、という小説『何をなすべきか』の構想は、この当時のチェルヌイシェフスキーの「極端なジョルジュ・サンド精神」を基にしているのかもしれない。あるいはまた、『何をなすべきか』のもう一つの中心的テーマである「理性的エゴイズム」もロボドフスキーへの援助という形でこの時期彼が実践していた、といえるかもしれない。隣人愛とエゴイズムの否定は宗教的な環境で育ったチェルヌイシェフスキーにとっては骨の髄までしみ込んだキリスト教の教えであった。ロボドフスキーへの援助はこの文脈から説明することも可能であろう。実際、1849年の暮れにロボドフスキーの就職が決まりそうになった時、チェルヌイシェフスキーは就職によって彼への援助の必要がなくなることを「私のエゴイズムが望む」と自

らのエゴイズムと結びつけながら自嘲気味に語っている [I, 335]。

チェルヌイシェフスキーがロボドフスキーに強く惹かれるもう一つの要因として、彼がロボドフスキーの才能を高く評価し尊敬していた、ということが挙げられる。

結婚式の直後の評価。「偉大な人だ。言葉の完全な意味で真に高潔な人だ」 [I, 42]。9月になっても高い評価は変わらない。ロボドフスキーは「真に偉大な人だ。もしかしたら知性というよりは心において偉大なのかもしれない」 [I, 115]。たしかに両者の会話が主に文芸評論に集中していた当初こそは、チェルヌイシェフスキーより年上でしかも人生経験も豊富なロボドフスキーが世間知らずのチェルヌイシェフスキーを議論において圧倒したのも不思議ではない。しかしほどなく、足しげく「菓子屋」に通い、外国の新聞雑誌から西欧の政治状況に通じていたチェルヌイシェフスキーは、ロボドフスキーが政治に関してはほとんど素人であることに気づく。フランスの六月事件の影響もあろう、チェルヌイシェフスキーの関心が文芸批評から政治問題に移ようになると、ロボドフスキーも政治を話題にするようになるが、現実味がない。1848年8月にチェルヌイシェフスキーに対して「いかにしてわが国で革命を起こすか」「強く語った」ときもチェルヌイシェフスキーはプガチョフ反乱を例にして成功の見込みがないことを説いている [I, 67]。1848年にプロシアで欽定憲法が制定されたことが話題になった時も、会話についていけなかったため、チェルヌイシェフスキーから「あまりに少ししか読まず、何も知らない」と非難されている [I, 254]。さらに1849年5月に「愛と道徳性の伝道」と「物質的な貧困や欠乏などの追放」と、どちらがより必要か、という問題について両者が論争した時も、愛や道徳性を説くロボドフスキーは、物質的解放を重視するチェルヌイシェフスキーに論破され、チェルヌイシェフスキーが「第二の救世主になるだろう」と、おそらく皮肉を込めて、語るのだった [I, 281]。

ところがチェルヌイシェフスキー自身は真剣に自分が「第二の救

世主」になるかもしれないと考えている。同じ会話で、「自分を非常な大変革に宿命づけられている」と語り、「自動機械」、つまりは永久機関、の発明者となって「物質的労働から人類を解放する」と話しているのだ [I, 281]。しかも「物質的労働からの人類解放」という野望は、この時一時的の思い付きではない。ロボドフスキーの結婚直後（1848年5月）すでに「私の発明」に言及し [I, 34]、その年の9月には、自分が「永久で不断の生産機械」の発明によって「人類のための善の創造者」になることを考えるようになっていく。しかも「それが不可能だとは確信していない」 [I, 127]。1848年の暮れになると、この永久機関の構想は一層具体的になる。「一定の磁石の配置によって回転時の水深の違いに伴う水柱の重さの不均等を排除する」 [I, 185]、「perpetuum mobile、世界をひっくり返して、物理的關係において私を人類最大の恩人の一人にするであろう、私の機械」 [I, 253]。1849年になっても「永久機関についての思想」は「常に気にかかっていること」 [I, 251] であり、「機械」は自分の結婚と並んで彼の最大の関心事だった [I, 298]。1849年末には「あらゆる物質的な必要の撲滅」を「一般的希望」として述べており、「そしてそれは私の機械を通じて実現される」と宣言している [I, 298]。実際彼は、1849年5月と7月に容器に水車を入れてそれを回転させたり [I, 280]、下女の桶を持ち出たりして [I, 300]、永久機関の実験をしている。結果については言うまでもないが、重要なのはチェルヌイシェフスキー自身が永久機関の発明による人類の救済の可能性を確信していた、ということだ。たとえば1849年の夏休みにひどい胃炎に悩まされたとき、「万が一の場合に備えて」後継者に自分の事業を託すため、それまでの記録を書きあげて「封筒に入れて赤インクで上書き」している [I, 306]。ロボドフスキー夫婦の救済がキリスト教の説く隣人愛の教えに基づくとすれば、永久機関の発

明もまた、人類の救済というキリストの使命から説明できよう<sup>22</sup>。

後年の「ユートピア社会主義」との関係で、ペトラシエフスキー・グループの A.B. ハヌイコーフとの交流についても触れずにおくわけにはいかない。チェルヌイシエフスキーはペテルブルク大学の元学生ハヌイコーフからフーリエの教説やフォイエルバッハの無神論を知るからである。ただし、ペトラシエフスキー・グループについてはすでに 1840 年代ロシア革命思想の文脈で研究が進んでいるので、ここでは従来とは違う見地から両者の交流を分析してみたい。

チェルヌイシエフスキーが最初にハヌイコーフと出会ったのは、1848 年 10 月のことだった。彼が A.E. ニキテンコの授業<sup>23</sup>でゲーテについて発表したところ、当時、自由聴講生だったハヌイコーフが「科学による」「ゲーテの性格分析」の可能性について話しかけ、フーリエの「情念系列」について熱く語り始めたのであった [I, 178]。大学からの帰り道でハヌイコーフはフーリエについて熱心に語り、フーリエの説く共同生活について解説した。ユートピア社会主義との最初の出会い、ということでチェルヌイシエフスキーの思想展開にとっては一つの画期ではあるのだが、ハヌイコーフが「フーリエのリング」など資本主義批判ではなく、「情念系列」から話を始めたこと、そしてフーリエの実験が「2-3 の家族が同居できなかった」ために失敗したこと、「その原因についての研究」の必要性を説いたこと、などから考えると、この時チェルヌイシエフスキーが興味を覚えたのは、フーリエの心理学、「情念系列」による調和的な共同生活の教説だったのではないかと指摘することができよう。おりしもテルシンスキー夫婦との同居によって苦しんでいた当時のチェルヌイシエフスキーにとって、フーリエの説く調和的生活の教説は、

22 См. В. Кантор Чернышевский. Perpetuum mobile и размышления о «бесконечном усовершенствовании» христианства // ГЕФТЕР 17.06.2016. [http://gefter.ru/archive/18988] (2021 年 1 月 11 日閲覧)

23 1830 年からペテルブルク大学で定員外教授として文学を担当していた。彼の授業はゼミナール形式で、文学に関するテーマで学生が発表し、討論した [XIV, 155]。

人類の救済というよりは自身の救済の可能性という面で興味を覚えたのかもしれない。

しかも彼は、フーリエの「情念系列」論についても、すぐには受け入れていない。その日の日記に記している。「情念は通常法則的で、調和に導く」というところは「真実だ」が、「その他の大部分は空想だ。その数が12というが、その数は特に疑わしい」と [I, 179]。後日ハヌイコーフからフーリエ派の雑誌『ファランジェ』を借りてフーリエの宇宙論とその応用について読みだしても、「私には奇妙に思われ、ほとんどお笑いだ」と取り合おうとせず、フーリエ派が説く調和社会についても「そこに至る道」が示されていない、として否定的だ [I, 183]。

しかし『ファランジェ』を読み進めるにしたがって、アソシエーションが「科学の創造物であり、必然性は十分発達している」と認めるようになり [I, 184]、「アソシエーションについて語られていることは全く公正だと思われる。魅力的な労働とはどんなものだろう」 [I, 186] とフーリエの著作自体に興味を抱くようになる。とはいえ「結果に至る道筋を私が知らないがゆえに」「奇妙だ」、とも記している [I, 187]。これらの記述から、1848年12月初めにチェルヌイシェフスキーは、情念の法則性、情念引力を組み合わせた魅力的な労働、生産と消費の共同生活、というフーリエの体系の大部分をフーリエ派の雑誌から知ったものと思われる。

ただし、この時点でチェルヌイシェフスキーは、フーリエ派の説く家族を分解した共同生活や無神論については受け入れられない。ハヌイコーフの家で知り合ったデブーという人物<sup>24</sup>の説く「急進的という意味での政治」には「完全に同意した」ものの、家族について、神について、「私は同意しない」 [I, 188]。その時借りたフーリ

---

24 1848年12月4日にハヌイコーフを訪れたチェルヌイシェフスキーは、そこでやはりペトラシェフスキー・グループのИ. デブーと知り合う。デムチェンコはこの時ペトラシェフスキー・グループはチェルヌイシェフスキーをグループに加盟させようとした、と推定している。Демченко. С. 188.

エ全集第2巻を読んでも「底なしの奇妙さ」と評している [I, 188]。おりしも翌々日の12月6日はチェルヌィシェフスキーの「名の日」であった。この日、朝起きると彼は「数分間、跪いて祈った」[I, 189]。無神論へは転じていないのである。他方、「本能の満足」、「商業の害悪」などについてはフーリエを認めている [I, 195]。友人のラエフにも「心理学的問題について解説」し、「女性の奴隷化について」語っている [I, 207]。フーリエの受容は部分的なものにとどまった、といえよう。

また、フーリエ主義者の説くユートピアへの革命的移行についても、この時点でチェルヌィシェフスキーがそれを受容したとする説は再検討が必要であろう。実際、最初の訪問で「ひどいプロパガンディストだが、信念は平和主義」[I, 182] に思えたハヌィコーフが、次第にチェルヌィシェフスキーを信用して「わが国における革命の可能性とその近さ」について語りだすと、チェルヌィシェフスキーは「多少の不安」を感じている。フーリエの説くユートピアを一つの到達点として認めつつも、そこへの革命による移行には「多少の不安」を感じているわけである。

その後、チェルヌィシェフスキーはハヌィコーフからヘーゲルの『法の哲学』を借り、約一週間かけて読了するが、読み始めた直後から「少ししかわからなかった」、「天才的なものは見られない」[I, 230] と否定的だ。「彼は現状の、現行の社会制度の奴隷のようだ」[I, 231] と記していることから、チェルヌィシェフスキーはヘーゲルを右派的に解釈し、それゆえ興味を覚えていない。ハヌィコーフから勧められたから仕方がなく読んでいる、という書きぶりだ。読了した後でも彼は「特別なものは何も発見しなかった」[I, 237] と記している。フォイエルバッハの『キリスト教の本質』を借りても、それを無神論の教説というよりは哲学の認識論として受け止めている [I, 248]。レオ・シュトラウスも「特に何も」印象を与えていない [I, 253]。本来であればヘーゲルにしてもハヌィコーフの手引きを受けて読まなければ左派的解釈に到達できないであろうし、フォ

イエルバツハにして読むにあたっては手引きや解説が必要であったであろう。ただし、1848年4月にペトラシェフスキー・グループの逮捕が始まり、23日にハヌイコフも逮捕されたことによって、以後、チェルヌイシェフスキーとハヌイコフとの関係は絶たれることになる。

最後に急進的評論家、という後のチェルヌイシェフスキーとの関係で、学生時代のチェルヌイシェフスキーの文筆業へ向けた志向についても触れておこう。

先に述べたように、チェルヌイシェフスキーはペテルブルク大学の哲学部文学科へ入学している。文学を志してペテルブルクへやってきたことは間違いない。また、1848年の夏休み（大学2年生の終わり）頃までは文学は友人との会話のテーマにもなっていた。友人たちと『現代人』や『祖国雑記』を回し読みし、ディッケンスやジョルジュ・サンドの翻訳、あるいはゴーゴリ、レールモントフといったロシアの作家の作品を読み、気に入った箇所は書き写している。その後、1848年7月ごろから外国の新聞によってパリの六月事件とそれに続くフランスの反動化を知ると、彼の主要な関心は政治へと移っていく。それでも48年8月には、ルイ・ブランやピエール・ルルーを尊敬して「私は極端な、ウルトラ党に属しているようだ」と記すのと並行して、「ゴーゴリとレールモントフは到達不能に偉大だ」と文学への興味も失っていない [I, 66]。

実際彼は、雑誌にも投稿している。1848年7月にロボドフスキーの窮状を救うためにチェルヌイシェフスキーは雑誌に投稿することを考える。その時日記には、「『祖国雑記』における2度の失敗を経験したので、3度目の成功を考えていない」 [I, 201] と記していることから、すでにこの時点で少なくとも2回、雑誌に投稿していることが分かる。ちなみにこの時は投稿を思いとどまったようだ。約半年後の1849年1月に再び雑誌への投稿を計画しているときに彼は「『祖国雑記』で2度失敗した後では『現代人』を試してみようか」 [I, 222] と記しているからだ。この時はシヴェッツォーフとい

う人物から聞いた話をもとに「ジョセフィーヌ」について、一種の教育論のようなものを書こうとしている。結局チェルヌイシェフスキーは、3月初めにこの「ジョセフィーヌ」を書きあげ、『現代人』の事務所に届けるのだが [I, 250]、これもまた雑誌に掲載されることはなかった。

この時点で少なくとも 3 回、チェルヌイシェフスキーは雑誌投稿に失敗しているのだが、それにもかかわらず、1849 年 6 月にはゲーテの生涯を題材にした記事を構想し [I, 285]<sup>25</sup>、さらに 10 月にはふたたび小説を構想し [I, 325-326]、11 月半ばには書き上げている [I, 337]<sup>26</sup>。チェルヌイシェフスキーは書き上げた原稿を、『祖国雑記』の編集者、A.A. クラエフスキーの事務所に直接持ち込むが、たまたま当日は受付日でなかったためにその日は原稿を持ち帰っている [I, 337]。ここで不安になったのか、チェルヌイシェフスキーはニキテンコに原稿を預けて感想を聞こうとしている。おそらくペテルブルク大学教授という地位もあり、文人とも知り合いの多いニキテンコの推薦を受けて『祖国雑記』に投稿しようとしたものと思われる。

同じころ、チェルヌイシェフスキーは同郷人ですでに文筆家として活躍していた И.И. ヴヴェヂェンスキーのサークルも訪れている<sup>27</sup>。当時ヴヴェヂェンスキーはすでに『読書文庫』で翻訳家、評論家として活躍しており、『祖国雑記』や『現代人』にも記事を書いており、毎週水曜日に彼の家で開かれた会合にはペテルブルクの文人たちが集まってきていた。ここでは検閲によって発表できないようなテーマも話題に上った。ペトラシェフスキー・グループの事件が話

25 Понимание [XI, 696-699] .

26 Теория и практика [XI, 640-695] .

27 11 月 28 日がヴヴェヂェンスキーの「名の日」だったので、それを祝うために彼を訪問した。ただし、前の年の「名の日」には訪問していない [I, 181]。ヴヴェヂェンスキーの妻からもかさねて招待されてようやく「安心して彼らの家へ行ける」と語っているので、チェルヌイシェフスキーは、同郷人とはいえ年齢的には一回り年上ですでに文壇で成功しているヴヴェヂェンスキーに対して遠慮していたものと思われる。なお、彼の「水曜会」については、渡辺雅司「ヴヴェヂェンスキー・サークルとゲルツェン」、『一橋研究』、1974 年、第 27 号を参照。

題に上り [I, 346]、「社会主義的精神で語る」者もいたが、チェルヌイシェフスキーにとって退屈な話題の日もあった [I, 347] [I, 348] [I, 364]。また、メンバーも必ずしも急進主義者ばかりではなく、チェルヌイシェフスキー自身、ヴヴェヂェンスキー以外の「殿方」に「多少の俗悪さ」も感じている [I, 362]。

ヴヴェヂェンスキーの急進思想にひかれた、という従来の説明に加えて、ヴヴェヂェンスキーへのチェルヌイシェフスキーの接近は、彼が文壇へのコネ、あるいは就職の斡旋を期待した、という可能性もある。実際、チェルヌイシェフスキーに対してヴヴェヂェンスキーは、「貴族連隊のロシア語教師のポスト」が「可能だ」と語り [I, 371]、短い間だったがチェルヌイシェフスキーは第二幼年学校で教鞭を執っている。後日談になるが、1853年にサラトフから妻オリガとともにベテルブルクに戻ったチェルヌイシェフスキーは、それまでヴヴェヂェンスキーの住んでいたジダーノフ川岸通りの家に住んでいる<sup>28</sup>。チェルヌイシェフスキーにとってヴヴェヂェンスキーは急進的思想家というよりは、面倒見のいい同郷の先輩だったのかもしれない。

## むすび

論文「資本と労働」、あるいは小説『何をなすべきか』で展開されるチェルヌイシェフスキーの「急進思想」とは、私的所有権に基づく資本主義的自由競争を批判し、それに対するオルタナティブとしての共同所有、共同生産を軸とする組合組織を提示し、また、「理性的エゴイズム」倫理を示すことによって「新しい人々」の生き方を示し、女性の自立と解放を訴えたことにある。

本論においては、「ユートピア社会主義者」とされてきたチェルヌイシェフスキーの「急進思想」の根源として彼の学生時代に注目し、1848年から1850年に至る彼の日記を分析してきた。いうまで

---

28 Пили О.А. Чернышевский в Петербурге. Л., 1978. С. 60.

もなく、1848 年はヨーロッパ全土が政治的に大きく動揺した年であった。チェルヌイシェフスキーもその影響を免れていない。この時期彼は、ヨーロッパの政治過程を分析し、ルイ・ブランやブルードンを知り、社会的弱者への共感から自らを「社会主義者」と自己認識している。ヨーロッパの動乱という時代状況の中でチェルヌイシェフスキーは急進的思想へと傾斜して行くのである。

しかし、それと同時に、本論においては、そのような急進主義思想ではなく、テルシンスキー夫婦との同居という苦い実体験が、調和的生活を説くフーリエの「ユートピア社会主義」に彼を結び付けた可能性を指摘した。同様に、ロボドフスキーとの奇妙な共同生活の中に、後に『何をなすべきか』で示される「新しい人々」の共同生活、あるいは彼への金銭援助の中に「理性的エゴイズム」の原型を見てきた。さらにまた本論においては、「理性的エゴイズム」の源泉をキリスト教を説く隣人愛に求め、チェルヌイシェフスキーが情熱を傾けた永久機関の開発もまた、キリスト教の説く人類救済の展望へと結びつけて論じてきた。機械技術による労働からの解放は、「ヴェーラの夢」の中でも示される、チェルヌイシェフスキーのユートピアである。

また一方で、フォイエルバッハの無神論やヘーゲルの左派的解釈など、この時期にチェルヌイシェフスキーが触れながらも、消化しきれなかった思想もある。ジョルジュ・サンドも自由恋愛思想としては理解できたものの、経済的自立と組み合わせた女性解放論としては受容できていない。フーリエの「ユートピア社会主義」もそのままではチェルヌイシェフスキーの協同組合論には結びつかない。農村共同体論、あるいはオーウェンやミルの組合論をへて彼の「社会主義理論」へと統合されて行くのである。そもそもこの時点での彼の「社会主義」はフランス第二共和制の文脈での「社会主義」であり、しかも彼はそれらに直接触れたわけではなかった。保守系の新聞雑誌を通じて間接的に知ったに過ぎない。しかし、それぞれの時点では顕在的に受容されなかったこれらの思想も、チェルヌイ

学生時代のH.F. チェルヌィシェフスキー（大矢）

シェフスキーの中で熟成され、後の彼の「急進思想」へと組み込まれていくのである。彼の「急進思想」形成過程の分析については後日の課題としたい。

（令和2年度札幌大学研究助成による研究成果である）